一般研究・個人研究

# 日系アメリカ人の教育意識に関する研究

田　中　圭治郎

## はじめに

本稿は日系アメリカ人が現在、社会的・教育的にどのような意識を持っているかのアンケート調査の報告である。今回の調査は仏教徒と天理教徒という宗教別の比較によって、またアメリカ本土の仏教徒とハワイの仏教徒という地域別の比較によって、さらに回答言語別（英語で回答した者と日本語で回答した者）の比較によって日系人の実像に少しでも接近することを意図したものである。

調査対象はアメリカ本土の仏教徒63名、ハワイの仏教徒29名、アメリカ本土ならびにハワイの天理教徒29名（カナダ、ブリティシュ・コロンビア州在住者２名を含む）である。アメリカ本土の仏教徒の場合、調査をロサンゼルス及びバークレーの東本願寺に依頼したため、調査対象は東本願寺の信徒が圧倒的に多かった。調査用紙は200部配布されたが、回収用紙は78部であり、今回キリスト教徒ならびに無宗教の者15名は調査の対象から外したため、実質回答数は63名である。内訳は東本願寺信徒54名、西本願寺信徒５名、単に仏教徒と記述した者４名となっている。調査時期は昭和57年８、９月である。ハワイの仏教徒の場合も、調査をハワイ別院、カネオへ、ワイメアの各東本願寺に依頼したため、東本願寺の信徒が圧倒的に多かった。調査用紙は200部配布され、回収用紙は41部であり、キリスト教徒ならびに無宗教の者５名を除外し残り36名すべてが東本願寺の信徒である。調査時期は昭和58年８、９月である。天理教徒は天理市の38母屋に滞在していた北米在住の信徒を対象に行い、回収率はほぼ

100パーセントに近かった。なおメキシコ在住の天理教徒２名は調査対象から除外した。調査時期は昭和57年６月である。

この調査では前二者が東本願寺に関係のある人々に対して行ったため、年齢的な偏りがあることは事実であろうが、仏教に関心を持っている日系人の意識把握に役立つであろう。特に米本土とハワイとでは同じ条件で調査を行ったため、仏教徒の意識の地域的比較が容易に出来ることと思われる。ただ天理教徒の場合、米本土とハワイでの調査用紙の回紙がうまくいかず、日本に旅行中の信徒だけの調査だけに終り調査対象が限定されたため、三者間比較の信憑性が若干薄れたことは事実であろう。なお以下調査結果についてのべていくが、総数にバラツキがあるのは無解答を統計から除外したためである。

## １　米本土の仏教徒、ハワイの仏教徒と天理教徒の比較

### (ア)　概略

まず最初に３つのタイプの人たちがどのような特徴をもっているかについてのべてみたい。

表　１

| | 一　世 | 二　世 | 三　世 | 四　世 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 6<br>(9.5%) | 47<br>(74.6%) | 10<br>(15.9%) | 0<br>(0.0%) | 63 |
| ハワイの仏教徒 | 0<br>(0.0%) | 15<br>(51.7%) | 12<br>(41.4%) | 2<br>(6.9%) | 29 |
| 天理教徒 | 16<br>(55.2%) | 7<br>(24.1%) | 6<br>(20.7%) | 0<br>(0.0%) | 29 |
| 計 | 22<br>(18.2%) | 69<br>(57.0%) | 28<br>(23.1%) | 2<br>(1.7%) | 121<br>(100.0%) |

これをみると、天理教徒は１世が半分以上を占めるのに対し、米本土の仏教徒は２世が74.6パーセントを占め、ハワイの仏教徒は２世は51.7パーセント、

3世が41.4パーセントとなっており、天理教徒は1世が多く、本土の仏教徒は2世が、ハワイの仏教徒は2・3世が中心となっていることがわかる。天理教徒の場合、熱心な信徒が1世中心なのか、それとも日本へ旅行中の信徒が1世中心となっているのかは断定出来ない。ただ仏教徒の場合、ハワイの方が信徒の中心が2世から3世へと移りつつあることがうかがわれる。

これを年齢別にみると、

表　2

| | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代 | 80代 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 1 (1.6%) | 6 (9.5%) | 4 (6.3%) | 7 (11.1%) | 19 (30.2%) | 24 (38.1%) | 1 (1.6%) | 1 (1.6%) | 63 |
| ハワイの仏教徒 | 0 (0.0%) | 4 (13.8%) | 6 (20.7%) | 4 (13.8%) | 6 (20.7%) | 8 (27.6%) | 1 (3.4%) | 0 (0.0%) | 29 |
| 天理教徒 | 3 (10.3%) | 7 (24.1%) | 8 (27.6%) | 6 (20.7%) | 3 (10.3%) | 2 (6.9%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 29 |
| 計 | 4 (3.3%) | 17 (14.0%) | 18 (14.9%) | 17 (14.0%) | 28 (23.1%) | 34 (28.1%) | 2 (1.7%) | 1 (0.8%) | 121 (100.0%) |

表1との比較から表2を説明してみよう。天理教徒は1世が多いが、年齢的には10代から60代までまんべんなく分布していることがわかる。一方、本土の仏教徒は2世が中心であり、年齢的にも50代、60代で68.3パーセントと過半数を占めていることがわかる。ハワイの仏教徒は2・3世が中心となっており、50代・60代の48.3パーセント、20代・30代・40代の48.3パーセントとより若い世代の信徒の占める割合が高くなっている。

(イ)　日本語の読解力について

次に日本語の能力について質問してみた。

表3をみても天理教徒は1世が中心のため、ひらがな、カタカナ、漢字の読解力が確かだろうと推測される。このことは次の質問事項によっても明確化さ

れるであろう。

表3　「あなたはどれくらい日本語が読めますか」

| | 漢字(多数) | 漢字(少数) | ひらがな・カタカナ | 全然読めない | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 18 (29.5%) | 30 (49.2%) | 6 (9.8%) | 7 (11.5%) | 61 |
| ハワイの仏教徒 | 2 (6.9%) | 12 (41.4%) | 7 (24.1%) | 8 (27.6%) | 29 |
| 天理教徒 | 17 (58.6%) | 10 (34.5%) | 2 (6.9%) | 0 (0.0%) | 29 |
| 計 | 37 (31.1%) | 52 (43.7%) | 15 (12.6%) | 15 (12.6%) | 119 (100.0%) |

表4　「あなたはどこで日本語を学ばれましたか」

| | 日本で日本語を学ぶ | 日本語学校で学ぶ | 日本語学校以外の教育機関で学ぶ | 全く学ばなかった | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 22 (34.9%) | 36 (57.1%) | 1 (1.6%) | 4 (6.3%) | 63 |
| ハワイの仏教徒 | 4 (13.8%) | 20 (69.0%) | 1 (3.4%) | 4 (13.8%) | 29 |
| 天理教徒 | 19 (65.5%) | 8 (27.6%) | 2 (6.9%) | 0 (0.0%) | 29 |
| 計 | 45 (37.2%) | 64 (52.9%) | 4 (3.3%) | 8 (6.6%) | 121 (100.0%) |

天理教徒は「日本で日本語を学」んだものが、65.5パーセントも占め、「全く学ばなかった」ものが、0.0パーセントであり、この調査での天理教徒に限っていえば、かなり日本的な色彩をもった人達であることがわかる。それに対して、本土とハワイの仏教徒は現地の「日本語学校で学ぶ」と答えたものが、それぞれ57.1パーセント、69.0パーセントと過半数を占め、さらに「全く学ばなかった」者がそれぞれ6.3パーセント、13.8パーセントにも達していることに注目したい。というのはアメリカにおける仏教教会（寺院）においては日本語

が大きな位置を占めているため、日本語の必要性が認められるのであるが、それにもかかわらずこのような状況なのである。それゆえ、仏教教会の方が日本語中心の内容を英語中心の内容へと変更を求められている。次に彼らの学歴についてのべてみよう。

表5　学　　歴

| | 小学校卒 | 中学校卒 | 高校卒 | 短大・各種学校卒 | 大学卒 | 大学院卒 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 2 (3.2%) | 3 (4.8%) | 33 (52.4%) | 8 (12.7%) | 12 (19.0%) | 5 (7.9%) | 63 |
| ハワイの仏教徒 | 3 (10.3%) | 4 (13.8%) | 9 (31.0%) | 6 (20.7%) | 4 (13.8%) | 3 (10.3%) | 29 |
| 天理教徒 | 0 (0.0%) | 1 (3.7%) | 10 (37.0%) | 6 (22.2%) | 8 (29.6%) | 2 (7.4%) | 27 |
| 計 | 5 (4.2%) | 8 (6.7%) | 52 (43.7%) | 20 (16.8%) | 24 (20.2%) | 10 (8.4%) | 119 (100.0%) |

解答者119名のうち、短大・各種学校、大学、大学院卒業者の合計が54名もおり、その比率は47.4パーセントとほぼ全体の半数近くになっているのに注目したい。特に天理教徒は戦後アメリカへ渡った人々が中心であろうと予想されるが、彼らは本土とハワイの仏教徒との比較の中でもかなり高学歴であることがわかる。

(ウ)　日本文化への関心度

彼らが日本文化、日本的な価値に対してどのような意識をもっているかについてのべてみよう。

表6に見られるように、「たいそう」関心があると答えた者は、本土の仏教徒の62.9パーセント、天理教徒の57.1パーセント、ハワイの仏教徒の41.4パーセントの順となっており、本土の仏教徒の62.9パーセントが特に高い比率を示

している。

表6　「あなたは日本文化に関心がありますか」

| | たいそう | 少　し | 関心がない | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 39 (62.9%) | 23 (37.1%) | 0 (0.0%) | 62 |
| ハワイの仏教徒 | 12 (41.4%) | 16 (55.2%) | 1 (2.4%) | 29 |
| 天理教徒 | 16 (57.1%) | 11 (39.3%) | 1 (3.6%) | 28 |
| 計 | 67 (56.3%) | 50 (42.0%) | 2 (1.7%) | 119 (100.0%) |

表7　「日系アメリカ人の若者がアメリカ社会で地位向上を図ろうとした場合、日本的なものをもっていることが、役に立つと思いますか」

| | は　い | いいえ | 計 |
|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 48 (78.7%) | 13 (21.3%) | 61 |
| ハワイの仏教徒 | 26 (92.9%) | 2 (7.1%) | 28 |
| 天理教徒 | 27 (93.1%) | 2 (6.9%) | 29 |
| 計 | 101 (85.6%) | 17 (14.4%) | 118 (100.0%) |

「はい」と解答した者のうち天理教徒は1世が中心なので、93.1パーセントと高い比率を示しているのはわかるが、本土の仏教徒78.7パーセント、ハワイの仏教徒92.9パーセントの比率の違いはどうしてであろう。ハワイの場合、知事は日系人であり、公務員の50パーセント以上が日系人、特に教員は日系人が独占している事情を考慮した場合、これらの違いが出てくるのは当然であろう。また、天理教徒、仏教徒という日本的なものを多くもった人びとに対して質問を行ったからこのような結果が出たのであり、キリスト教徒に対して行えば異なった結果が出たかもしれない。次に両親の養育義務について質問した。

表８　「両親が年老いた時、長男・長女が親のめんどうを見るのは義務だと思いますか」

| | は　い | いいえ | 計 |
|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 30<br>(50.0%) | 30<br>(50.0%) | 60 |
| ハワイの仏教徒 | 12<br>(41.4%) | 17<br>(58.6%) | 29 |
| 天理教徒 | 19<br>(67.9%) | 9<br>(32.1%) | 28 |
| 計 | 61<br>(52.1%) | 56<br>(47.9%) | 117<br>(100.0%) |

この結果をみると「はい」と解答した者は、天理教徒の67.9パーセント、本土の仏教徒の50.0パーセント、ハワイの仏教徒の41.4パーセントとなっている。１世が多い天理教徒が高い比率を示しており、２世が多い本土の仏教徒、次の世代へと移行しつつあるハワイの仏教徒と順に比率が低くなってきている。それは、世代が変わるにつれて、両親の扶養義務が平等にすべての子どもの責任となってきたのか、それとも子どもに扶養義務感がなくなってきたのかのどちらかであろう。現在日本でも両親の扶養義務が必ずしも長子に限定されなくなってきているが、１世の多い天理教徒が高い比率を示しているということは、日本人の方がアメリカの日系人よりも長子の養育義務意識が強いことを示すものと思われる。

次に質問対象者に、もし子どもがあれば自分の子どもの人種間結婚（intermarrige）についてどう思うかをたずねてみた。

自分の子どもの他人種との通婚について「すべての人種との通婚に同意」が天理教徒の39.1パーセントに対し、本土の仏教徒は4.2パーセントしか同意していないし、ハワイの仏教徒でも16.7パーセントしか同意していない。本土とハワイとの差が開いている理由は、ハワイではさまざまな人種が混り合っており、また黒人の絶対数も少ないし、かつハワイアン、サモアンといった膚の黒

表9　自分の子どもの人種間結婚に関して

| | 子どもの結婚相手アジア人・白人・黒人共に同意 | 子どもの結婚相手アジア人・白人同意、黒人不同意 | 子どもの結婚相手アジア人同意、白人・黒人不同意 | 子どもの結婚相手白人同意、アジア人・黒人不同意 | 子どもの結婚相手日系人以外のすべての人種との通婚に反対 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 2 (4.2%) | 27 (56.3%) | 6 (12.5%) | 3 (6.3%) | 10 (20.8%) | 48 |
| ハワイの仏教徒 | 3 (16.7%) | 10 (55.6%) | 1 (5.6%) | 0 (0.0%) | 4 (22.2%) | 18 |
| 天理教徒 | 9 (39.1%) | 7 (30.4%) | 6 (26.1%) | 1 (4.3%) | 0 (0.0%) | 23 |
| 計 | 14 (15.7%) | 44 (49.4%) | 13 (14.6%) | 4 (4.5%) | 14 (15.7%) | 89 (100.0%) |

い人たちが多く存在しているため、米本土ほど黒人に対する偏見が強くないと思われる。「日系人以外のすべての人種との通婚に同意しない」のは、天理教徒の0.0パーセントに対して、仏教徒は本土、ハワイともに20パーセントをこえているということは、通婚に関して天理教徒の方がより寛容だということが出来る。アジア人、白人との通婚には同意するが、黒人との通婚には同意しないという項目は、本土の仏教徒55.6パーセント、天理教徒30.4パーセントとかなりの高率を示しており、日系人が、黒人との通婚には反対という限界はあるが、通婚に対してかなり柔軟な考えをもつようになってきたことがうかがわれる。ただここで興味深いことは、通婚相手が「アジア人は同意するが、白人・黒人は同意しない」の項目の方が、「白人は同意するが、アジア人・黒人は同意しない」の項目よりも高い比率を示していることである。日本に住む日本人にとって、他のアジア人よりも白人の方が結婚相手としてより好ましいと感じられる場合が多いのに対し、日系人がアジア人の方がより好ましいと思うのは、彼らが日本人ほどアジア人に対する偏見が強くなく、むしろ価値観が日系人に近いために、白人よりは親近感を持っているという理由からであろうと思われる。

(エ)　学校観

まず学校通学への理由づけについて聞いてみた。「なぜ学校へ行きましたか。適当と思うものに[ ✓ ]印をして下さい」(いくつでもチェックできる)

[　　]良い仕事を得るため、[　　]知識を得るため、[　　]友人を作るため、[　　]両親の命令に従って、の４つのうち１つでも「両親の命令に従って」にチェックをしてある者をⅠ型、その他の者のうち１つでも「友人を作るため」にチェックをしてある者をⅡ型、それ以外の者で「良い仕事を得るため」か「知識を得るため」にチェックをしてあるのをⅢ型として分類してみた。

表10　「なぜ学校へ行きましたか」

| | Ⅰ　型 | Ⅱ　型 | Ⅲ　型 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 21<br>(33.9%) | 10<br>(16.1%) | 31<br>(50.0%) | 62 |
| ハワイの仏教徒 | 10<br>(35.7%) | 4<br>(14.3%) | 14<br>(50.0%) | 28 |
| 天理教徒 | 8<br>(27.6%) | 5<br>(17.2%) | 16<br>(55.2%) | 29 |
| 計 | 39<br>(32.8%) | 19<br>(16.0%) | 61<br>(51.3%) | 119<br>(100.0%) |

この調査項目の意図は、子どもたちの通学が親の意志をかなり反映したものであろうと予想されたからである。しかし、結果は三者とも30パーセント前後である。「友人を作るため」も三者共それぞれ16.1パーセント、14.3パーセント、17.2パーセントと少く、「良い仕事を得るため」、「知識を得るため」という目的をもって通学する者が50パーセントを越しており、Ⅰ型、Ⅱ型に分類されている者の多くがⅢ型の項目にもチェックしているため、子どもの時代の通学動機が「良い仕事を得」たり、「知識を得」るという主体的なものであったことがわかる。

表11　「子どもの頃、学校へ行くのが好きでしたか」

| | たいそう好き | 少し好き | あまり好きでない | 全く好きでない | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 21<br>(33.3%) | 35<br>(55.6%) | 7<br>(11.1%) | 0<br>(0.0%) | 63 |
| ハワイの仏教徒 | 10<br>(34.5%) | 15<br>(51.7%) | 4<br>(13.8%) | 0<br>(0.0%) | 29 |
| 天理教徒 | 12<br>(41.4%) | 12<br>(41.4%) | 5<br>(17.2%) | 0<br>(0.0%) | 29 |
| 計 | 43<br>(35.5%) | 62<br>(51.2%) | 16<br>(13.2%) | 0<br>(0.0%) | 121<br>(100.0%) |

義務型が予想以上に少なかったため、この質問項目に対しても、「全く好きでない」は、それぞれ0.0パーセントであり、それに対し、「たいそう好き」、「少し好き」を合計すると、本土の仏教徒88.9パーセント、ハワイの仏教徒86.2パーセント、天理教徒82.8パーセントと過半数が学校に好意的な態度を示している。次に彼らの学校時代の学習態度についてのべてみよう。学校教師に対する態度について質問してみた。

表12　「先生を尊敬しましたか」

| | たいそう | 少　し | あまり | 全　然 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 46<br>(73.0%) | 16<br>(25.4%) | 1<br>(1.6%) | 0<br>(0.0%) | 63 |
| ハワイの仏教徒 | 19<br>(65.5%) | 8<br>(27.6%) | 2<br>(6.9%) | 0<br>(0.0%) | 29 |
| 天理教徒 | 16<br>(55.2%) | 11<br>(37.9%) | 1<br>(3.4%) | 1<br>(3.4%) | 29 |
| 計 | 81<br>(66.9%) | 35<br>(28.9%) | 4<br>(3.3%) | 1<br>(0.8%) | 121<br>(100.0%) |

先生を「たいそう」尊敬している者は、本土の仏教徒73.0パーセント、ハワイの仏教徒65.5パーセント、天理教徒55.2パーセントとなっているが、それに反し「あまり」尊敬していない者、「全然」尊敬していない者を合計しても、三者共それぞれ1.6パーセント、6.9パーセント、6.8パーセントと10パーセン

トを切っており、日系人が学校の教師を尊敬していることがわかる。しかし、日本的な色彩を多くもっている天理教徒が先生への尊敬の念という日本的なものに対する質問に対して一番低い比率しか示していないのはなぜか。戦後日本において先生に対する尊敬の念が崩れ、逆にアメリカにおける日系人の間では、戦前の教師観が残存しているというのがその理由かもしれない。

表13　「あなたは学校の成績を気にしましたか」

| | たいそう | 少　し | あまり | 全　然 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 本土の仏教徒 | 29<br>(46.0%) | 25<br>(39.7%) | 9<br>(14.3%) | 0<br>(0.0%) | 63 |
| ハワイの仏教徒 | 12<br>(41.4%) | 15<br>(51.7%) | 2<br>(6.9%) | 0<br>(3.4%) | 29 |
| 天理教徒 | 10<br>(34.5%) | 16<br>(55.2%) | 2<br>(6.9%) | 1<br>(3.4%) | 29 |
| 計 | 51<br>(42.1%) | 56<br>(46.3%) | 13<br>(10.7%) | 1<br>(0.8%) | 121<br>(100.0%) |

学校の成績を「たいそう」気にした者は本土の仏教徒46.0パーセント、ハワイの仏教徒41.4パーセント、天理教徒34.5パーセントとなっており、学校の教師に対する態度と同じ結果となっている。また、米本土の仏教徒の方がより学校の成績に関心をもっているといえる。

## 2　英語回答者と日本語回答者の比較

日系人の宗教別比較をしてきたのであるが、日系人を宗教別に分類するだけでは十分でないということがわかる。そこで、英語での回答者と日本語での回答者を比較することによって、英語で思考する者と日本語で思考する者がどのような相違をもっているかを検討してみたい。この調査の対象者が仏教徒、天理教徒という限定があることは事実であろうが、そういった限界を考慮したうえで、次に英語回答者と日本語回答者との比較の中から、彼らの日本、日本文

化への関心度、教育観についてのべてみたい。(質問項目は宗教別比較で使用したものを用いる。)

表14　学　　歴

| | 小学校卒 | 中学校卒 | 高校卒 | 短大・各種学校卒 | 大学卒 | 大学院卒 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 5<br>(5.0%) | 8<br>(7.9%) | 41<br>(40.6%) | 15<br>(14.9%) | 23<br>(22.8%) | 9<br>(8.9%) | 101 |
| 日本語での回答者 | 0<br>(0.0%) | 0<br>(0.0%) | 11<br>(61.2%) | 5<br>(27.8%) | 1<br>(5.6%) | 1<br>(5.6%) | 18 |
| 計 | 5<br>(4.2%) | 8<br>(6.7%) | 52<br>(43.7%) | 20<br>(16.8%) | 24<br>(20.2%) | 10<br>(8.4%) | 119<br>(100.0%) |

戦前、1世の移民はさとうきび畑の労働者をはじめ未熟労働者が大部分であり、彼らは初等教育を終了するかしないかの学歴しか持ちあわせていなかった。そして日本語しか話せないということはアメリカ社会適応への大きな障害となった。この調査結果をみると、日本語での回答者の学歴もかなり高く、高校卒が過半数を占めているのがわかる。彼らは大部分日本で教育を受けたことと思われるが、短大、各種学校卒27.8パーセント、大学卒5.6パーセント、大学院卒5.6パーセントとなっており、かなり高歴が高く、それゆえ英語もかなり話せ、アメリカ社会への適応が戦前の1世にくらべてより可能である。

(イ)　日本文化への関心度

表15　「あなたは日本文化に関心がありますか」

| | たいそう関心がある | 少し関心がある | 関心がない | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 53<br>(53.0%) | 45<br>(45.0%) | 2<br>(2.0%) | 100 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 日本語での回答者 | 14<br>(73.7%) | 5<br>(26.3%) | 0<br>(0.0%) | 19 |
| 計 | 67<br>(56.3%) | 50<br>(42.0%) | 2<br>(1.7%) | 119<br>(100.0%) |

日本文化への関心度は、当然のことながら日本語で回答したものが多くなっている。

表16　「日系アメリカ人の若者がアメリカ社会で地位向上を図ろうとした場合、日本的なものをもっていることが役に立つと思いますか」

| | は　い | いいえ | 計 |
|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 83<br>(84.7%) | 15<br>(15.3%) | 98 |
| 日本語での回答者 | 18<br>(90.0%) | 2<br>(10.0%) | 20 |
| 計 | 101<br>(85.6%) | 17<br>(14.4%) | 118<br>(100.0%) |

この質問に対する解答結果も、「はい」と解答したもののうち、日本語で回答したものが90パーセントにもなっているのは当然であるが、英語で回答をした者も84.7パーセントにもなっている。これは調査対象が天理教徒、仏教徒という、より日本的な人たちだからであろう。

表17　「両親が年老いた時、長男・長女が親のめんどうをみるのは義務だと思いますか」

| | は　い | いいえ | 計 |
|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 48<br>(49.5%) | 49<br>(50.5%) | 97 |
| 日本語での回答者 | 13<br>(65.0%) | 7<br>(35.0%) | 20 |
| 計 | 61<br>(52.1%) | 56<br>(47.9%) | 117<br>(100.0%) |

この結果をみると、日本語で回答した者の65.0パーセントが「はい」と答えているのに対し、英語のそれは49.5パーセントと半数を割っており、日本的な

考え方をもっている者の方が長子の両親養育義務を当然と考えている。

日本的なものを維持することに関して、自分の子どもの通婚についてほど各人の意識が表面に出るものがない。次に自分の子どもの通婚観について質問してみた。

**表18　自分の子どもの人種間結婚に関して**

| | 子どもの結婚相手アジア人・白人・黒人同意 | 子どもの結婚相手アジア人・白人同意、黒人不同意 | 子どもの結婚相手アジア人同意、白人・黒人不同意 | 子どもの結婚相手白人同意、アジア人・黒人不同意 | 子どもの結婚相手日系人以外のすべての人種との通婚に反対 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 13<br>(18.1%) | 38<br>(52.8%) | 9<br>(12.5%) | 10<br>(13.9%) | 2<br>(2.8%) | 72 |
| 日本語での回答者 | 1<br>(5.9%) | 6<br>(35.3%) | 4<br>(23.5%) | 4<br>(23.5%) | 2<br>(11.8%) | 17 |
| 計 | 14<br>(15.7%) | 44<br>(49.4%) | 13<br>(14.6%) | 14<br>(15.7%) | 4<br>(4.5%) | 89<br>(100.0%) |

自分の子どもの通婚に対して人はたいそう保守的になるのが通例である。すべての人種との通婚に同意すると答えた者は、英語で回答した者18.1パーセント、日本語で回答した者5.9パーセントとなっており、日本語で回答した者の方がより日本人としての純粋性を求めていることがわかる。黒人以外のアジア人、白人との通婚に同意する者は、英語での回答者52.8パーセントに対し、日本語での回答者35.3パーセントで、かなりの差がある。さらにすべての人種との通婚に反対なのは、英語での回答者が13.9パーセントにすぎないのに、日本語での回答者は23.5パーセントにも達している。

(ウ)　学校への態度

次に学校への態度を回答言語別にのべてみたい。

表19　「なぜ学校へ行きましたか」

| | Ⅰ　型 | Ⅱ　型 | Ⅲ　型 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 35<br>(35.4%) | 18<br>(18.2%) | 46<br>(46.5%) | 99 |
| 日本語での回答者 | 4<br>(20.0%) | 1<br>(5.0%) | 15<br>(75.0%) | 20 |
| 計 | 39<br>(32.8%) | 19<br>(16.0%) | 61<br>(51.3%) | 119<br>(100.0%) |

ここで特徴的なのは、「両親の命令に従って」の項目について英語で回答した者の35.4パーセントにくらべ、日本語で回答した者は20.0パーセントと少く、日本語回答者の方が学校通学の義務感が少ない。また「友人を作るため」という項目はあまりチェックをされておらず、それよりもむしろ「良い仕事を得るため」、「知識を得るため」にチェックした日本語回答者が75.0パーセントと大きな比率を示している。これは前述したように、Ⅰ型にチェックしたものの多くが「良い仕事を得るため」、「知識を得るため」にもチェックしており、英語で回答した者もそうであるが、特に日本語で回答した者の大部分が目的をもって学校へ行っていたことがわかる。

表20　「子どもの頃、学校へ行くのが好きでしたか」

| | たいそう | 少　し | あまり | 全　然 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 35<br>(34.7%) | 53<br>(52.3%) | 13<br>(12.9%) | 0<br>(0.0%) | 101 |
| 日本語での回答者 | 8<br>(40.0%) | 9<br>(45.0%) | 3<br>(15.0%) | 0<br>(0.0%) | 20 |
| 計 | 43<br>(35.5%) | 62<br>(51.2%) | 16<br>(13.2%) | 0<br>(0.0%) | 121<br>(100.0%) |

「たいそう好き」は日本語で回答した者40.0パーセント、英語で回答した者34.7パーセントであり、前者が多いが、「あまり」好きでない者は逆に英語で回答した者は12.9パーセントにくらべ、日本語で回答した者は15.0パーセントとなっており、学校への学習態度は、両者ともあまり差がないようである。

表21　「先生を尊敬しましたか」

| | たいそう | 少　し | あまり | 全　然 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 66 (65.3%) | 31 (30.7%) | 4 (4.0%) | 0 (0.0%) | 101 |
| 日本語での回答者 | 13 (75.0%) | 4 (20.0%) | 0 (0.0%) | 1 (5.0%) | 20 |
| 計 | 81 (66.9%) | 35 (20.0%) | 4 (3.3%) | 1 (0.8%) | 121 (100.0%) |

先生への尊敬度についても「たいそう」と「少し」尊敬した者の合計は、英語での回答者96.0パーセント、日本語での回答者95.0パーセントと絶対的多数が先生を尊敬しており、両者に違いはない。

表22　「あなたは学校の成績を気にしましたか」

| | たいそう | 少　し | あまり | 全　然 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 英語での回答者 | 46 (45.5%) | 47 (46.5%) | 7 (6.9%) | 1 (1.0%) | 101 |
| 日本語での回答者 | 5 (25.0%) | 9 (45.0%) | 6 (30.0%) | 0 (0.0%) | 20 |
| 計 | 51 (42.1%) | 56 (46.3%) | 13 (10.7%) | 1 (0.8%) | 121 (100.0%) |

学校の成績の場合、英語で回答した者と日本語で回答した者の間にかなり差が出てきている。つまり「たいそう」気になるのは、英語で回答した者は45.5パーセント、日本語で回答した者25.0パーセントと差があり、「たいそう」気にする、「少し」気にするを合計すると前者は96.0パーセント、後者は70.0パーセントとなっており、英語で回答した者の方が学校の成績を気にしていることがわかる。

## おわりに

以上米本土とハワイの仏教徒と天理教徒に関するアンケート結果に基づいて、彼らの社会・教育意識について宗教別ならびに回答言語（英語・日本語）別にのべてきた。天理教徒は1世が多いためか、かなり日本的な色彩を残しており、本米土の仏教徒は2世が中心であるため、その次に日本的な色彩を残しており、ハワイの仏教徒はその中心が2世から3世へと移行しつつあるためか、かなりアメリカ的になっている。というのは日本語読解力、通婚観に如実に非日本的特徴が示されているからである。しかし学校観となると事情を異にしてくる。学校通学への義務観、教師への尊敬の態度、学校の成績への強い関心が日本人の特性と考えられていたにもかかわらず、この調査では2、3世の多いハワイの仏教徒の方が他の二者にくらべて高い比率を示している。同様なことは英語で回答した者と日本語で回答した者との比率でもいえる。日本語で回答した者は日本への関心度、他人種との通婚への閉鎖性に関しては当然のことながら高い比率を示しているのに反し、学校観の質問項目に関しては、英語での回答者の方がより主体的に学校にかかわっている。これは、学校通学の理由、先生への尊敬度、学校の成績観の質問事項において、英語回答者がかなり高い比率を示していることでもわかる。理由としては、学校重視、学歴重視が日本の伝統であるという仮説が否定されたのか、それとも日本的なものが、戦後の日本人には残っておらず、むしろアメリカの日系人の中に、アメリカ的な社会階層移動の考え方と結合して残存しておるかのどちらかであろう。先生への尊敬度は一般的にアメリカ人より日本人の方が高いといわれており、また日系人自身、先生への尊敬は日本的な伝統と自覚している場合が多いため、この理由は後者のように日系人の中に日本的なものが純粋な形で存在していると結論づけるのが妥当なようである。